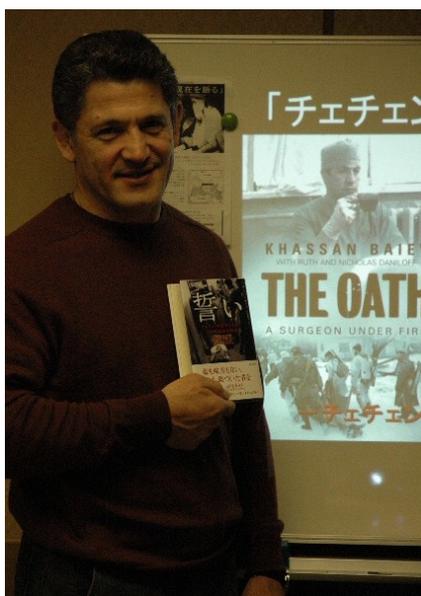


# 「チェチェンの現在を語る」

A Chechen War Surgeon Speaks Out: Dr. Khassan Baiev's Japan Tour, November 2006

主催:ハッサン・バイエフを呼ぶ会 共催:チェチェン連絡会議  
後援:日本ビジュアル・ジャーナリスト協会 チェチェンの子どもを支援する会 (社)アムネスティ・インターナショナル日本

わたしは自己の能力と判断の及ぶかぎり、病者の治療に力を尽くします。わたしの治療によって  
いかなる人を傷つけることも欺くこともいたしません ——ヒポクラテスの誓い



プロフィール.....	2
チェチェンの子ども達国際委員会活動報告.....	3
チェチェンの子ども達国際委員会について.....	4
来日記者会見.....	6
講道館での柔道稽古のもよう.....	9
チェチェン略年表.....	10
新聞各紙の報道.....	11

ロシア南部のチェチェン共和国では、1994年から12年間続くロシアの軍事侵攻により、100万人の人口のうち20から25%が死亡し、50%が難民としてチェチェン国外に逃れています。私たち「ハッサン・バイエフを呼ぶ会」は、世界でもっとも悲惨な戦争を目の当たりにしながらも、敵味方の区別なく必死の治療にあたり、今も医療支援活動続けるチェチェン人のハッサン・バイエフ医師を日本に招き、11月17日から29日にかけて、水戸、横浜、札幌、長崎、広島、京都、弘前、東京と、全国各地で講演会を行いました。

主催団体：ハッサン・バイエフを呼ぶ会について チェチェン支援者、ジャーナリスト、出版社などの有志が集って結成した団体です。この来日は一般の皆様からの寄付によって支えられています。  
送金先：郵便振替口座番号：00180-6-261048 加入者名：チェチェン連絡会議 金額：一口3,000円（通信欄に「バイエフ」とご明記ください）

連絡先：ハッサン・バイエフを呼ぶ会 共同代表 林克明／岡田一男 〒112-0001 東京都文京区白山2-31-2-101 岡田一男気付  
電話：03-4500-8535 Fax：03-3811-4576 Mail：  
baiev@zau.att.ne.jp http://tokyocinema.net/baiev.htm  
チェチェン連絡会議 clc@chechennews.org



photo: Tohoku Judo Club



## ハッサン・バイエフとは？ Khassan Baiev(外科医、柔道家)

1963年、チェチェンの首都グロズヌイの郊外、アルハン・カラ生まれ。1977年、ソ連邦ジュニア柔道大会で優勝し、以後多くの柔道大会にて金メダルを獲得。1985年、クラスノヤルスク医科大学卒業。1988年チェチェンに帰国し、首都グロズヌイにて形成外科医として医務につく。1994年、チェチェン戦争の勃発とともに、野戦外科医として活躍。敵味方を区別しない医療活動のために、ロシア連邦軍とチェチェン過激派双方から命を狙われる。2000年米国へ亡命、同年11月米国NGO・ヒューマンライツ・ウォッチから「2000年人権監視者」の荣誉を受けた。NGO、チェチェンの子ども達国際委員会議長。柔道の創始者である故・嘉納治五郎氏を心から尊敬するバイエフ医師は、来日のさいに講道館道場での稽古も行なった。

### 関連書籍「誓いーチェチェンの戦火を生きたひとりの医師の物語」

ハッサン・バイエフ著 天野隆司訳 アスペクト刊 2004年 2,940円

勇気ある真の人間（書評） バイエフはロシア人、チェチェン人の区別なく、時には彼自身を危機に陥れようとする人物までも執刀した。たとえ相手が何者であれ、患者の命を救うためにぎりぎりまで努力した。しかし、彼は「医師」である前に、「勇気ある真の人間」であると言いたい。…バイエフは、患者や家族のために、自分の命をたびたび危機にさらしている。そんな彼を神は見捨てない。危機一髪で何度も命拾いをする。あたかもバイエフの覚悟ある行動を見届けた神が、ぎりぎりのところで、運命の駒をよい方向へちょっとずらしてくれているようだ。——林京子/チェチェンニュース 2004.6.4



**チェチェン戦争とは？** ロシア南部に位置するチェチェンは、19世紀にロシアが併合した地域で、先住民のチェチェン人が人口のほとんどを占めている。1991年のソ連邦崩壊の際、チェチェンは独立を宣言したが、94年、ロシア政府は武力侵攻を開始した。その後3年間の休戦をはさんで、泥沼の戦争が続いている。この戦争によって、人口100万人のうち、すでに20万人以上の民間人が犠牲になったと言われている。（10ページに略年表）

参考サイト：「チェチェン総合情報」 <http://chechennews.org/>

今後のイベント：11/29(水) 東京[バイエフ医師報告会 & 送別会 ー日本縦断講演を終えてー] 18:00-20:30 文京区民センター3F 会議室C 参加費：2,000円（飲食物の持込・カンパ歓迎） 主催：バイエフを呼ぶ会 共催：チェチェン連絡会議 連絡先：03-4500-8535/baiev@zau.att.ne.jp（岡田）



## チェチェンの子ども達国際委員会 活動報告

<http://chechenchildren.org/>

2006年4月

友人および支援者の皆様

「チェチェンの子ども達国際委員会」の過去8ヶ月の活動を報告します。

3月に、委員の一人がチェチェンを訪問しました。訪問の目的は、進行中のプロジェクトを評価し、6年におよぶ戦争の中でとてつもない犠牲を受けている子ども達を支援するための、最良の方策を検討することでした。

委員によれば、人々が銃撃されるような状態はほとんどなくなっていました。彼らはチェチェンの外からの支援がほとんど受けられない中で、破壊され尽くした生活を再建しようと必死になっています。戦争の結果は、しばしば戦闘そのものよりも悲惨なものです。人々は疲れ果て、親族を失った悲嘆に暮れ、人生を変えてしまった心身の病と闘っています。いくつかの学校や病院が再建されましたが、医師や看護師、教師が不足しています。

私たちの代表は、皆様の寄付金が過去に使用されたいくつかの団体への訪問を行いました。

グローズヌイ聾学校では、二人の教師に特別訓練を行いました。委員の視察によって、子ども達が、私たちの提供した教科書やその他の物資を使って学んでいることが確認されました。

**→現在必要とされているもの：聴覚や視覚に障害を持った子ども達に教えるための道具**

グローズヌイの第二小児神経病院では、私たちの支援によって、ようやく電気と水が復旧し、病院が再び機能するようになりました。子ども達は、

私たちが送った6つの箱に入っていた玩具を使って遊んでいます。

**→現在必要とされているもの：医療物資全般**

貧困家庭への支援：委員は、私たちが少額の寄付や衣料を提供しているいくつかの家庭を訪問し、新たに300の貧困家庭に600の小麦袋を配給するよう手配しました。けれども、少額の寄付や数枚の衣服、小麦袋といったものだけでは、絶望的なほどの貧困状態にある家庭——彼らの多くはストリートチルドレンになっていた孤児を引き取っています——を支えることはできません。ですが、彼らが心から感謝してくれたことで、自分たちのしていることが無駄ではなかったと思うことができました。委員の報告によれば、彼が訪れたときに泣いてしまった家族もいたそうです。米国人が自分たちのことを気に掛けてくれていることなど、想像もできなかったのでしょうか。「あなたたちが私たちを救ってくれた」と言った女性もいました。

今後の計画：委員の訪問によって、「チェチェンの子ども達国際委員会」が支援することのできそうないくつかの団体が見つかりました。

委員は、チェチェン視覚障害者連盟——理事のハーヴァ・カーリーモヴァと彼女の夫がともに視覚障害者の団体——と連絡を取りました。カーリーモヴァ夫人の報告によれば、目の見えない子ども達を受け入れていた3校のうち2校が、戦争によって破壊されたということです。今では、目の見えない子ども達は、しばしばひどい状態で——教育や訓練を一切受けることもできず——ただ家の中で暮らしています。

→現在必要とされているもの： 適応指導、聴覚装置、点字習得教材、視覚障害者用ゲーム

委員は、チェチェン AIDS 対策センターのヘダ・アイドミーロヴァと会見し、HIV 感染が特定のリスク集団から住民全体に広がってきているという報告を受けました。感染者の中には、妊娠可能年齢の女性や、子ども達もいます。

彼女の報告によれば、毎月 8 名から 10 名の新たな感染者が発見され、絶望的な社会的・経済的状況や、失業、若い世代の倦怠によって、状況は悪化の一途を辿っているということです。

→現在必要とされているもの： HIV 感染を診断・治療するための医療物資

委員は、地元のパン屋と契約し、聾学校と小児神経病院に一日 50 斤のパンを届けてもらうよう手配しました。これは単に子ども達に食事を与えるというだけの契約ではなく、現地の雇用を活性化させることにもつながります。

アルハン・カラの子ども達のダンスグループ：このグループは、若者を路上から引き離し、戦争の経験しかない彼らに文化の重要性を教えようとする熱心なボランティアによって設立されました。

→現在必要とされているもの： 楽器、衣装、シンセサイザー

●統計

現在のチェチェンの推定人口は 45 万人です。1994 年の第一次チェチェン戦争が始まる前には、チェチェンの人口は 100 万人強でした。推定 25 万人のチェチェン人が戦争によって死亡しています。推定 15 万人が難民としてチェチェン国外に逃れています。また、推定 15 万人のチェチェン人が国内避難民として地下室や爆撃された建物の中で暮らしています。

- 国土の推定 75%が環境汚染を受けている。
- 約 4 万人の子どもが戦争で命を失った。
- 2 万 6 千人の孤児がいる。
- 約 1 万 4 千人の子ども達が病気に罹患。
- 2 人に 1 人の子どもが先天的な障害を持って生まれてくる。
- 妊娠中の女性のうち推定 80%が妊娠関連の病気にかかっている。
- 推定 40%の子どもが視覚または聴覚に問題をかかえている。視覚または聴覚、発声に障害を持つ子どものうち、教育を受けている割合は 5%にすぎない。
- 検査を受けた子どものうち推定 70%が肺結核にかかっている。

最後になりますが、改めて皆様のご支援に感謝いたします。皆様のご支援のおかげで、チェチェンの人々は、自分たちが世界から完全に見捨てられているわけではないと思えるようになってきています。ハッサン・バイエフ医師

## チェチェンの子ども達国際委員会について (議長 ハッサン・バイエフ)

アメリカ合衆国非営利 (501) (c) (3) 法人

The International Committee for the Children of Chechnya

P. O. Box 381305 Cambridge, MA 02238 USA [info@chechenchildren.org](mailto:info@chechenchildren.org)



●チェチェンの子ども達国際委員会の始まり  
チェチェンの子ども達国際委員会 (ICCC) の構

想は、1995 年の春にロシア兵士の母たち、仏教僧たち、クエーカー (友会徒) の一団がモスクワか

らチェチェンの戦場に向かう行進に出発した時に生まれました。

「生命と思いやり」のための母親たちの行進は、グローズヌイを目指すものでした。その道すがら、彼らは殺戮と暴力を目撃し、戦う双方の軍人たちと出会い、語り合い、そしてチェチェンの母親たちから歓迎を受けました。行進者たちは行進にあたって自らの生命を危険にさらしました。そして、彼らを歓迎し、助けたチェチェン人たちもまた、生命を危険に晒すことになったのです。

母親たちの行進は、双方の兵士たちに武器を置くことを呼びかけ、ロシア、チェチェン双方の指導者たちに、交渉の席に着くように呼びかけました。また、参加者たちは、世界に向かってチェチェンで何が起きているのかを見守るように呼びかけました。

ボストン在住の数名の女性たちは、行進者たちと彼らを歓迎したチェチェン人たちの勇気を称えようとしました。私たちはチェチェン平和実現の活動を支援することを決意したのです。私たちはまたチェチェンの子ども達に代わって活動していくこと、彼らの両親や、学校の先生たちや、リハビリテーション活動家、お医者さん、そして母親行進の信念を共有するすべての人々の努力を支えていくことを決意したのです。

## ●「生命と思いやり」のための母親行進の声明

(1995年春)

生命は地上における最も偉大な宝です。いかなる状況にあっても一人の人間が生きる権利を奪うこと、何者であっても、してはならないことです。このことは、あらゆる国内法、国際法によって疑いもなく保証されています。しかし、チェチェンにおける戦争は、数万人に及ぶ罪なき人々の生命を奪い続けています。そして数十万の人々の家庭や、資産や、幸福を破壊しています。戦争はあら

ゆる平和的手段を駆使して押しとどめなければなりません。

数百名のロシア兵士の母親たちは、息子たちを戦場の地獄から守れるなら、自分たちの命も惜しくはないと覚悟しています。この思いやりの心こそ、この狂気、恐怖と憎悪を克服して、平和を達成する唯一の力です。

この行進は、こうした母親たちの思いやりの心の意思表示として行われています。その目的は、戦争の終結を呼びかけ、チェチェンの人々を襲った痛みと悲しみを分かち合おうというものです。

行進の参加者は、ロシアとコーカサスの母親たち、ロシアと諸外国の宗教団体、人権ならびに人道支援団体の代表たち、ジャーナリスト、そして非暴力と思いやりの心の力を信じる者たちです。

私たちは、世界中の善意の人々、反戦活動家、宗教指導者、軍隊の司令官、報道関係者、地方行政指導者に、支援と協力を訴えます。そしてこの行進に加わって下さるあらゆる方々を歓迎します。

この「生命と思いやり」のための母親行進は、民族と宗派を超え、民衆の運動となって、苦しみを癒す力の源泉となり、人々に平和と幸福をもたらすことを願っています。

## ●ICCG 現行役員

ハッサン・バイエフ医師 (議長) Khassan BAIEV

アメリカ在住のチェチェン人外科医でチェチェンの健康で安全な未来と、子ども達のために活動しています。彼は「誓い」(日本語版・2004年アスペクト刊)の著者です。この本は、彼の生い立ちと最近の二つのチェチェン戦争の回想を綴ったものです。バイエフ医師は、ヒューマンライツ・ウォッチ、国境なき医師団、アムネスティ・インターナショナルなどから表彰されています。

ルス・ダニーロフ(創立メンバー) Ruth DANILOFF

北コーカサスにおける人権問題に長い間関心を寄せてきた女性作家・ジャーナリストです。彼女

の論評はニューヨーク・タイムズ紙、ワシントン・ポスト紙、ボストン・グローブ紙、スミソニアン・マガジン誌その他の国内外の紙誌に掲載されています。彼女はバイエフ医師およびニコラス・ルスと並んで「誓い」の共著者でもあります。

#### イヴリン・J・ムッサー Evelyn J. MUSSER

教師兼非営利組織の経験豊かな事務局長です。彼女はこれまでずっとロシア問題に関心を寄せ、国際研究交流ボード (IREX) のような米国の教育 NGO で、モスクワにおける文化プログラムの事務管理者を務めてきました。

#### ラムザン・マゴメドフ Ramzan MAGOMEDOV

オレゴン州ポートランドのメイ・マネージメン

ト社の投資マネージャーです。チェチェンに生まれ、1992年に米国に移住しました。彼は(中部ロシアの) サラトフ大学で獣医学を学びました。米国ではミネソタ農業大学で学び、ティガード・ロータリー・クラブの役員と、レーク・オスウェゴ商業会議所の議長に選出されました。ICCCの役員には2004年12月に加わっています。

#### グウェンドリン・ウィッターカー (創立メンバー)

Gwendolyn WHITTAKER

特に旧ソ連地域の人権問題や文芸に関心が深い女性フィクション・ライターです。彼女は長い間、アムネスティ・インターナショナルでのボランティア活動を続けています。

## 来日記者会見 (11/16)



11月16日、全水道橋会館でハッサン・バイエフ来日記者会見が行われました。バイエフ氏は前日の早朝にボストンを出発して、午後成田到着、夕方記者会見というかなりハードなスケジュール。記者会見には約20名が参加して、会場が閉まる直前までインタビューが続けられました。

### ●バイエフ氏による発表

まず、本日ここにいらしてくださった皆さまと、私を日本に招聘してくださった方々に感謝を申し上げます。

始めに、チェチェンそのものについてご紹介させていただきたいと思います。チェチェンはカスピ海と黒海の間にはさまれている小さな国で、周囲

一帯をロシアに囲まれています。ロシア以外では唯一南の国境をグルジアと接しています。

チェチェンでは戦争前に約100万人だった人口のうち、25万人の民間人が死亡しています。この25万人というのは、子どもや女性、老人、若者といった人々です。戦争で亡くなった子どもの数は、一説によると4万人とされています。この戦争による影響は、何世代かを経なければ決して回復しないものです。

私の勤めていた病院には、毎日何十人もの負傷者が運び込まれてきました。私たちは、輸血用の血液や麻酔、手術器具など、すべてが不足した中で、患者の手足の切断手術を行わなければなりません。毎日のように銃撃戦と空爆があったために、病院では窓ガラスが飛ばないようにガラスを砂袋で覆っていたほどです。

第一次と第二次のチェチェン戦争では、多くの医師や看護師も命を落としました。私の病院では、医療機関であることを示す大きな赤十字の旗を立てていたのですが、それは何の役にも立たなかつ

たどころか、かえって標的にされてしまいました。



### ●チェチェンの戦火と子ども達（スライド上映）

やや短めの発表の後にはスライドが上映され、チェチェンの戦火の中で起こった出来事や、バイエフ氏の現在の活動が語られました。

彼の著書『誓い』の米国版“THE OATH”の表紙には、タイトルを挟んで上下に二枚の写真があります。どちらも2000年に撮影されたもので、下は、地雷によって負傷したチェチェンゲリラ約300人がバイエフ氏の病院に運び込まれてきたときの写真、上は、48時間のあいだ水さえも口にせず、手術室から一步も出ずに、不眠不休で67人の切断手術と7人の頭蓋切開手術を終えた後に、初めて一杯の紅茶を飲んでいるバイエフ氏の写真です。彼がこのとき命を救った人間の中に、ロシア政府が1000万ドルの賞金をかけていた野戦司令官シャミーリ・バサーエフがいたことが、バイエフ氏に亡命を余儀なくさせるきっかけとなりました。

戦争の中で、もっとも深刻だった問題のひとつは、医療物資がどうしようもなく不足していたことでした。バイエフ氏や看護師たちは、電気やガス、お湯さえもない状況で、大工用の弓のこを使って患者の手足を切断し、傷口の縫合には家庭用の糸を、消毒液には食塩水を、麻酔薬には普通の鎮痛剤を用いて、手術を続けなければならなかった。

バイエフ氏がもっとも危惧しているのは、12年

にもおよぶ戦争がチェチェンの子ども達に与える影響です。チェチェン戦争によって、約1万4000人の子ども達が身体に障害を負いました。新生児の二人に一人が先天的な障害をかかえているという統計もあります。チェチェンの新生児死亡率は26人/1000人。日本の2人/1000人の13倍もの高さです。チェチェンでは結核が蔓延していて、子どもの70%が結核にかかっていると言われています。

彼が代表を務める米国のNGO、「チェチェンの子ども達国際委員会」（ICCC）では、戦争によって障害を負ったチェチェンの子ども達を支援するために、チェチェンの病院や学校への医療・教育援助を行っています。ICCCの日本語版サイトでは、今年の2月に自ら現地入りしたバイエフ氏による報告が紹介されています。よろしければご覧ください。[\(http://www.chechenchildren.org/\)](http://www.chechenchildren.org/)

### ●質疑応答

Q：医師になったきっかけを教えてください。

バイエフ：やはり家庭の影響が大きいと思います。私の家庭は、姉2人が看護師で、父が薬草に興味を持っていました。ですが、私は医科大学に入学するまでは家族に対しても医師になりたいと言ったことはありませんでした。というのは、医師になる人は普通の人間ではいけないと思っていたのですね。

私はもともとは整形外科医になりたかったので。当時、『セオドア』というアメリカ映画があって、それは女性が整形手術に失敗して大変な目に遭うという映画なのですが、それを見て整形外科医になろうと思っていたのです。けれども、戦争中は専門を変えざるをえませんでした。

それまでは整形手術という、人の容姿を美しくする仕事をしていたのに、戦争が始まったことで患者の手足の切断手術をしなければならなくなったわけで、それは非常に精神的につらいことでし

た。

**Q：どのような病院で手術をしてきたのですか？**

バイエフ：戦争が始まった1994年の終わりに、それまで勤めていたグローズヌイの病院が破壊されたので、故郷のアルハン・カラに戻って診療所を開設しました。ところが、この診療所もすぐに破壊されたため、自宅を改装して診療所にしたのです。1995年2月には、その自宅も破壊されました。

その後は、ウルス・マルタンやチェチェン各地で手術を行い、第一次チェチェン戦争後から1999年10月まではグローズヌイ第九病院で働き、その後、アルハン・カラに戻って手術を続けました。

**Q：敵味方の区別なく治療にあたったということですが、その根底にあるものは何なのでしょう？**

バイエフ：父や母によるしつけが一つにあります。それから医科大学を卒業するときに『ヒポクラテスの誓い』を受け入れたことですね。

**Q：『誓い』の中で、チェチェンにいるご両親と会えない状態が続いていると書かれていましたが、今もそうした状態が続いているのでしょうか？**

バイエフ：今年の2月にチェチェンに帰って姉や母親と再会することができました。もちろんチェチェンを訪れることにはリスクがともないますが、これ以上家族と離れている状況に耐えられなかったのです。

ですが、そこで私が目の当たりにしたのは、チェチェンの土地が新しいお墓で埋めつくされている光景でした。これほど多くの若い人のお墓が立てられている状況というのは、これまで見たこともありませんでした。チェチェンでは、今でも毎日のように心筋梗塞や医師にも原因がわからない病気によって多くの人が亡くなっています。

チェチェンでは、2人、あるいは3人、4人、それ以上の人が亡くなっていない家族はありません。私の家族もそうです。人々の顔そのものに戦争の影響が色濃く出ています。人の顔を見て年齢を判断するのは不可能です。というのは、若い人でも

老人のように皺や白髪が出ているからです。

私はチェチェンに戻ったとき、なるべく家の外に出ないようにしていました。チェチェンの状況を見るのがつらかったのです。

今、私は何より子ども達をこの状況から救い出さなければならぬと感じています。先天的な奇形を持って生まれてくる子ども達が増えています。2万6000人の子どもが戦争孤児になったと言われています。少しずつでも自分たちのできる範囲で救援をしたいと思っているのですが、今のところ活動を拡大できるようなポテンシャルを持ち合わせておりません……。

**Q：チェチェンの状況をよくするためにはどうすればよいのでしょうか？EUや日本の役割をどうお考えですか？**

バイエフ：まずはチェチェン人に与えられてしまったイメージ、これは私自身アメリカにいても肌で感じるイメージですが、これを変えなければなりませんでしょうね。

EUや日本の役割については、まず人道的な支援があると思います。チェチェンでは1万4000人の子ども達が手足を失っています。彼らに対する支援が必要です。

それから、チェチェンの学生に留学する機会を与えてほしいと思います。チェチェンでは、専門の訓練を受けたいいわゆる「スペシャリスト」が決定的に不足しています。失業率も高く、若者は何をしようかわからず路頭に迷っています。彼らに教育の機会を与えてほしいのです。

**Q：『誓い』は何ヶ国語で出版されているのですか？売上や反響についてもお聞かせください。**

バイエフ：本は16ヶ国で出版されています。売上については他の国のことはわからないのですが、アメリカではハードカバーが1万5000冊、ペーパーバックがやはり1万5000冊出版されました。スペイン、特にバスク地方でも、かなり売れているようです。

本を執筆した動機は、アメリカ人があまりにもチェチェンについて知らないという状況を目の当たりにしたことです。チェチェンをスロバキアだと思っている人もいましたし、アフガニスタンやイラクの一部だと思っている人もいました。

アメリカを始めとする西側の人々にチェチェン人のことをよりよく知ってもらうために、私たちが「テロリスト」などではないということを知ってもらうために、『誓い』を執筆したのです。

読者からは、チェチェンのことを今まで知らなかったという手紙や、チェチェンの伝統はすばらしいという手紙が送られてきました。『誓い』は、今では多くの大学の授業の参考書になっています。

**Q：戦争中に爆撃を受けて何度か失神されたということですが、そのときの状況と後遺症についてお聞かせください。**

バイエフ：私は戦争中、爆撃を受けて3回脳震盪を起こしています。2000年に、人権のための医師団とヒューマン・ライツ・ウォッチが、イングーシにいた私を探し出して健康状態について尋ねてくれました。私はリハビリが必要だと答えました。毎日の爆撃と手術、負傷者のうめき声が頭から離れず、そうした状態から精神的に回復することが必要でした。

その後、アメリカに亡命して、チェチェンとはまったく違う平和な環境に置かれたわけですが、ワシントンでの6ヶ月のリハビリ生活の中で、私の問題が始まりました。私は、たとえば“apple”というような簡単な単語を、6ヶ月かけても覚えられなかったのです。これは明らかに戦争による後遺症のひとつです。

チェチェン人は誰もがトラウマをかかえています。私は戦争をチェチェンに置き去りにして出てきたわけではありません。戦争は、私と一緒にアメリカまでついてきているのです。

私の子ども達はアメリカの学校に通っているのですが、ある日、私と妻は学校の校長に呼び出されました。子ども達が戦車や爆撃、兵隊の絵ばかりを描いているというのがその理由でした。私は校長にこう答えました。「これが彼らの子ども時代なのです。彼らは、他の子ども時代を経験していません。きれいなおもちゃや遊び場もなく、ただ戦争が彼らの成長過程だったのです」と。

**Q：チェチェンに奇形児が多いのは化学兵器の影響なのでしょうか？**

バイエフ：戦争の後遺症、だと思います。戦争では、化学兵器に限らず、すべてのことが環境を破壊しています。(文責編集部)

---

## 講道館での柔道稽古のもよう (11/18)

次に、11月18日に講道館で行われた柔道稽古のもようをお伝えします。講道館というのは、「柔道の父」と呼ばれる嘉納治五郎氏が設立した柔道の総本山で、ここを訪れるのは、柔道家でもあるバイエフ氏にとって生涯の夢のひとつだったそうです。



この日は昼間に横浜での講演があり、バイエフ氏は講道館に向かう電車の中でうたた寝をしていたらしいのですが、講道館に到着して「八山」の

ネーム入りの胴着を受け取るなり、「疲れが吹き飛んだ」と言って畳の上で跳ね回っていました。なんというか、わりとかわいい面のある人です。稽古は一時間ほど行われ、バイエフ氏は三人の人と手合わせをしました。私は素人なので、たいていの選手は強そうに見えてしまうのですが、それを差し引いても彼のエネルギーには圧倒されました。そして、これはまったくの偶然なのですが、このときたまたま講

道館に来ていたロシア人の柔道家とバイエフ氏が25年ぶりに再会するという不思議な出来事もありました。

この日贈られた「八山」のネーム入りの胴着は、筑波大学附属高校の柔道部の生徒が、自分たちのお小遣いを出し合ってバイエフ氏にプレゼントしてくれたものです。講道館での稽古を実現させるにあたっては、同高校の鮫島先生や講道館の仮屋氏を始め、多くの方々にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。（邦枝律）



---

## チェチェン略年表

- 16世紀 帝政ロシアによるチェチェン侵略開始
- 19世紀 帝政ロシアがチェチェンを併合
- 1944年2月 スターリンによるチェチェン民族強制移住
- 1991年11月 ドゥダーエフ・チェチェン大統領がソ連邦からの独立を宣言
- 1991年12月 ソ連崩壊
- 1994年12月 ロシア、チェチェンへの軍事侵攻を開始（第一次チェチェン戦争）
- 1996年4月 ドゥダーエフ大統領、ロシア軍の攻撃により死亡
- 1996年8月 停戦合意の成立（第一次チェチェン戦争終結）
- 1997年2月 民主的な選挙によってマスハドフ氏がチェチェン大統領に当選
- 1999年8月 チェチェン野戦司令官バサーエフらによるダゲスタン侵攻
- 1999年9月 モスクワアパート爆破事件。プーチン首相（当時）は「チェチェン人の仕業」と断定、チェチェンへの軍事侵攻を再開（第二次チェチェン戦争）（アレクサンドル・レベジは爆破事件は政権側の仕業だと発言している。）
- 1999年12月 プーチン、ロシア大統領に就任
- 2002年11月 モスクワ劇場占拠事件（ロシア軍が突入時に撒いた神経ガスのため、人質120人以上が死亡）
- 2002年4月 アレクサンドル・レベジ、ヘリコプター墜落事故で死亡
- 2004年9月 北オセチア・ベスラン学校占拠事件
- 2005年3月 マスハドフ大統領、ロシア軍特殊部隊によって暗殺される
- 2006年6月 新大統領サドゥラーエフ殺害される
- 2006年7月 野戦司令官バサーエフ死亡

# 戦争 治療に敵も味方もない



砲火の下で手術をするハッサン・バイエフ医師(左) 著「誓い」から

## 信念貫いたチエチエン人医師

「私は私の治療によっていかなる人を傷つけることも欺くこともいたしません」医学の祖ヒポクラテスの「誓い」から。94年から2度にわたって起きたチエチエン戦争で、この「誓い」を胸に敵味方の区別なく負傷者の治療にあたったチエチエン人のハッサン・バイエフ氏が16日に初めて来日、全国8カ所で講演する。

### 来日、全国で講演へ

バイエフ氏は63年、チエチエン共和国生まれ。柔道選手として旧ソ連での数々の大会で優勝する一方、ソ連の医科大を卒業し、外科医として働いていた。94年にロシア・チエチエン間で戦争が始まると、民族や身分の区別なく負傷者の治療にあたった。そのためロシア軍とチエチエン過激派の双方から命を狙われた。00年に米国に亡命、現在はNGO代表としてチエチエンの子どもたちの教育や医療を支援している。

来日を働きかけたのは、チエチエン取材を続ける東京在住のフリージャーナリスト林克明さんや、映像作家の岡田一男さんら。バイエフ氏が自らの体験を描き、04年に日本で出版された「誓い」に感動したからだといふ。この戦いでは、人口100万人のうち、子ども4万人余りを含む20万人以上が命を失ったと言われる。病院が壊され自宅に何十人もの患者を収容して手術をし、ロシア



軍の脱走兵をも命がけでかくまった。林さんは「あれほどの過酷な状況の中で信念を貫き通した人物がいることを、日本の多くの人に知って欲しい」と話す。講演は17日から水戸、横浜、札幌、長崎、広島、京都、弘前(青森県)、東京の各地で開催の予定。詳しい日程などは「ハッサン・バイエフを呼ぶ会」のホームページ(<http://tokyocine.ma.net/baiev.htm>)。問い合わせは岡田さん(03・4500・8535)。

# ハッサン・バイエフさん



治療方なく敵味で戦場  
医師人チェチェン

手や足を切断し、7人の脳手術を行った。医療器具や薬品が底を突き、縫合糸の代わりに裁縫糸を使った。多くの人命を救った大工用のこぎりは隣

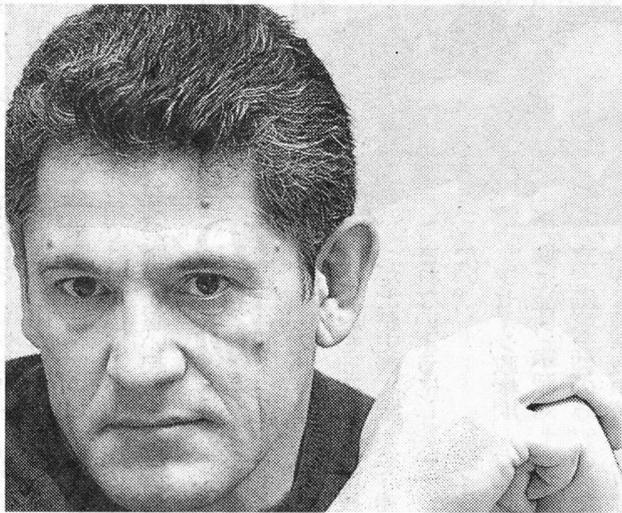
家からの借り物だった。負傷者の多くは一般市民だったが「患者はみんなの父、ヒボクラテスが言い残した『誓い』を実践したまでだ」

00年4月に米国へ政治亡命した。親族や仲間の医師を失った思い、被弾体験、子供たちのうめき声が目から離れず、PTSD(心的外傷後ストレス障害)に苦しむ。

## 戦争で受けた傷跡は 亡命先までついてきた

ロシアのチェチェン紛争は、死者20万人以上、難民・国内避難民約30万人を生み、いまだにやまない。その最前線で負傷者に向き合い、手術を続けた。

治療所だった古里の診療所や自宅が破壊された後は、戦場が手術室になった。雪を顔にあて、48時間ぶっ通しで67人の

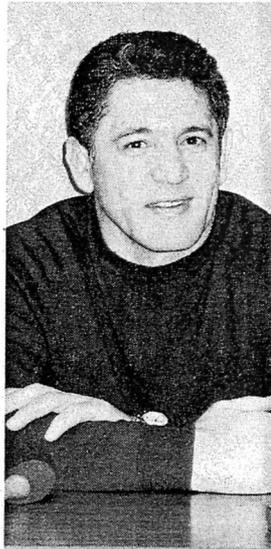


ぎりまでチェチェンにとどまった。「古代ギリシヤの医師の父、ヒボクラテスが言い残した『誓い』を実践したまでだ」

文と写真・高尾具成

首都グロズヌイ生まれ。43歳。講演の詳細は、ハッサン・バイエフを呼ぶ会 (<http://tokyocinema.net/baiev.htm>)

16日、都内で開かれた記者会見で、チェチェンの子供たちの実情を語るハッサン・バイエフ氏



## 「新生児の3分の1に障害」

チェチェン人医師 惨状訴え

ロシア・チェチェン紛争 1994年に始まった紛争

下で献身的な医療活動が続けたチェチェン人医師ハッサン・バイエフ氏(43)が、チェチェン独立派双方に分

紛争下の子供たちの悲惨な現状を伝えるため初来日

た。外科医のバイエフ氏は、

当たり、3昼夜で74件の手術を行った。この際、足を吹き飛ばされた独立派の指導者、バサエフ野戦司令官(06年7月死亡)を救ったことで、ロシア政府に逮捕状を出され、同年、米国への亡命を余儀なくされた。体験をつづった著書「誓い チェチェンの戦火を生きたひとりの医師の物語」(アスペクト刊)は各国語に翻訳され、感動をよんだ。

バイエフ氏は16日の都内の記者会見では、今年極秘にチェチェンを訪れた際に共和国保健省担当者から聞いた話として、「新生児の3分の1に障害が起きている」という衝撃的な実態を語った。絶え間ない爆音や振動が胎児に影響するため、四肢の不調や精神障害を持つて生まれるケースが後を絶たないという。

講演会は長崎(21日)、広島(23日)、京都(25日)、弘前(26日)、東京(28日)など。日程は「ハッサン・バイエフを呼ぶ会」のホームページ (<http://tokyocinema.net/baiev.htm>) で公開されている。

# アンケートにご協力をお願いします

本日はご来場ありがとうございます。よろしければ、アンケートへのご協力をお願いいたします。

1. 今日の報告会をどこでお知りになりましたか？

- ハッサン・バイエフを呼ぶ会ホームページ
- チェチェンニュース・チェチェンイベント情報・チェチェン総合情報
- 新聞・雑誌などの報道で（媒体名\_\_\_\_\_）
- 友人・知人から
- その他（ \_\_\_\_\_ ）

2. チェチェン関連の報告会・集会には初めて参加されましたか？

- 初めて
- 2～3回目
- それ以上

3. よかったら、この集会に参加しようと思われた理由を教えてください。

4. 集会へのご意見、ご感想、今後の活動へのご希望などがありましたらお書きください。

5. よろしければ、お名前とご住所をお書きください。次回以降の集会の際、ご案内をさしあげます。

〒

メールアドレス： \_\_\_\_\_ @ \_\_\_\_\_

お名前 \_\_\_\_\_

ご協力ありがとうございました。2006年11月 チェチェン連絡会議

Faxの場合は 03-3755-7096 にお寄せください。